

中村俊定文庫
文庫 18
664





序

いしり元々言ふべしといふく山水も
 清き河ほと何れ録せし後注
 のみあらん詩夢能語とも今也
 東方界平儀北於也異を初る能
 能塔都鄙不行も四方も流る能
 其名も延壽延長も出くも實也
 元和寛永に在る詩志ハ河能と



貞享元祿乃以芭蕉翁小いこを
真此正風切ら声り真系とくさりて
儂諧下耽る正とり此老信濃を所
本吾此麻きぬうまうさるあつ諸
いものや正くらんと圖下至月乃
呈小任て大表氏雅名素留とふ
唐れ娘み哉胸中ふさじ居まじ乃
各と文車小積て月君小乗一

苑なくさ次小め多蕉翁此靈哉
祭らんと一壘と築一碑哉建永々
風雅の傳るる張彩ふ小とうくさ
貴家公子追郷遠村乃雅多
其事哉現ふて章をよせ白張透共よ
蕉門正風此風流不和睦をかもけく
木ゆん君々代の悪次作や阿娘々
さ種は素留の名や使久於屋月の呈に

光れも倭宗祚の助、嶽いさみりやん
け時け節、苟々、ろさ、語、語のうみ、
阿る、あ、あ、善哉、善哉、洋く、と、と、
墨田川、子、筆、成、渡

維時寛政歳次癸丑如月文日

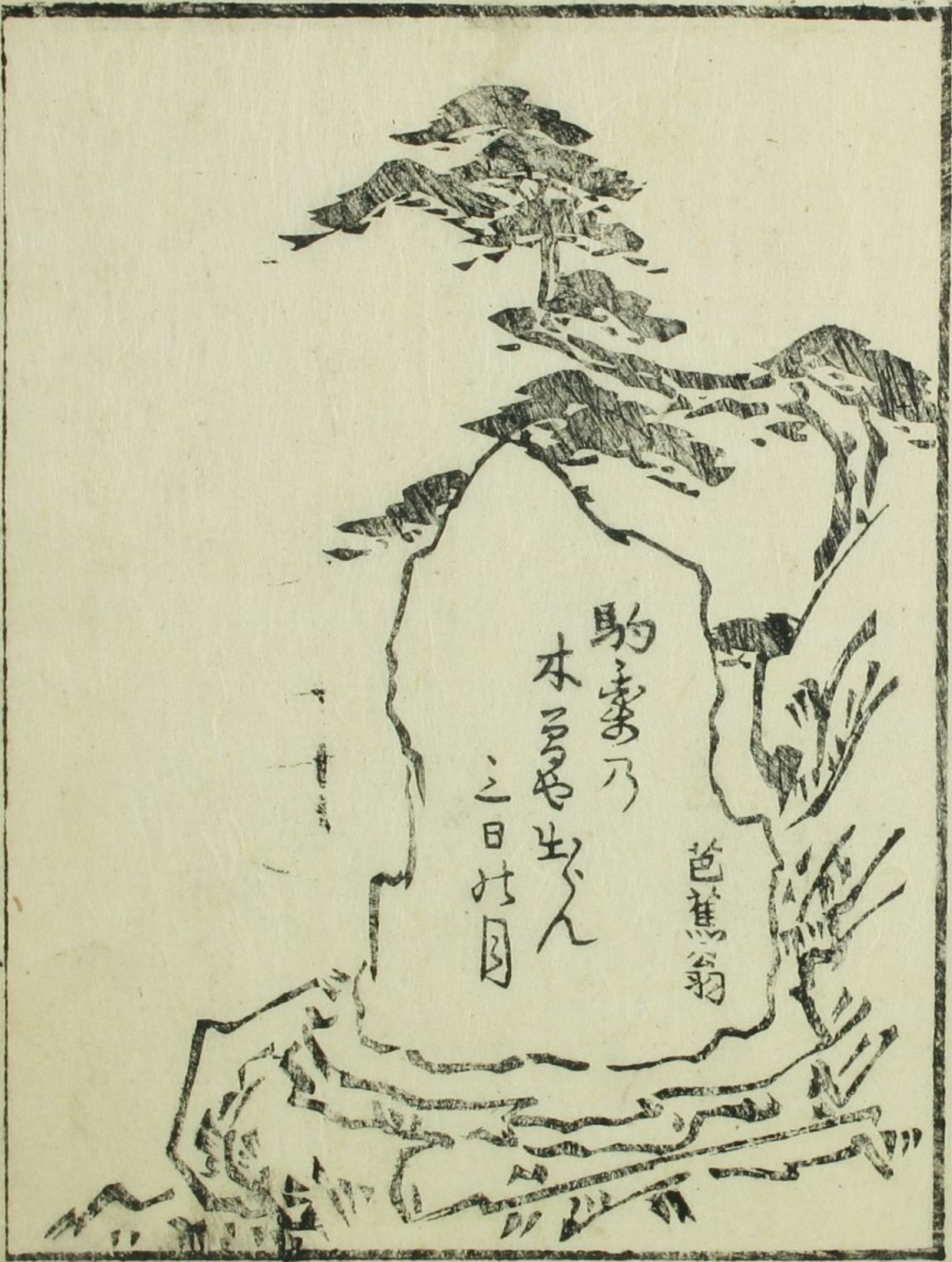
東都摩訶寛三珪山

自序

實了、聖月、不佳、名、幾、傳、ふ、と、と、
い、持、れ、加、み、ぬ、ま、
天、武、此、御、宇、小
牛、馬、を、國、氏、の、大、先、小、天、巧、幾、助、石
益、歎、あり、と、多、其、か、と、く、小、野、牧、を
射、し、そ、烟、ひ、表、ハ、せ、と、し、此、頁、小、
帝、せ、と、終、し、と、持、我、室、の、馬、み、つ、き、を
奉、く、の、仲、秋、是、れ、日、幾、と、と、都、小

三
素地於小あひたる月色此點一
譽より所牧と稱してかく所の字ハ
石路大と志く所を世々傳へた王
里く家く小素地法ありかく所
聖惡れ事跡も習れのみ續れ
國望くけ人さふるれ所ありいとめく度
今山市代不程をむひの雲半ありて
谷城聖母の遷り移りかくも素地

園亞相と此所筆をさふみ芭蕉翁駒室の
古歌城際路りり一を講小和舟此路を
蕉翁の風教也又素地志る一今文
仰くも愚あうう郊外が一塊を築て
聊祖靈城祭り所牧此駒塚と
号け其一章城碑ふうつ一素地
かつく長くひ及の築城初ると貴地
續くあく月花れ也小富る人く小



りひ所ふかあふ頁やひと秋来り
 きのおと積りふと重祿堂此紫の
 ちりうせぬた免ふあふひはきせぬ
 春のさくらあふと始くるる爾

嘯月臺素笥

天明壬子仲秋堅



招寄安仙筆

駒あや

夕三山振色心

五秋の露

醉月城花江子



狩野安仙筆

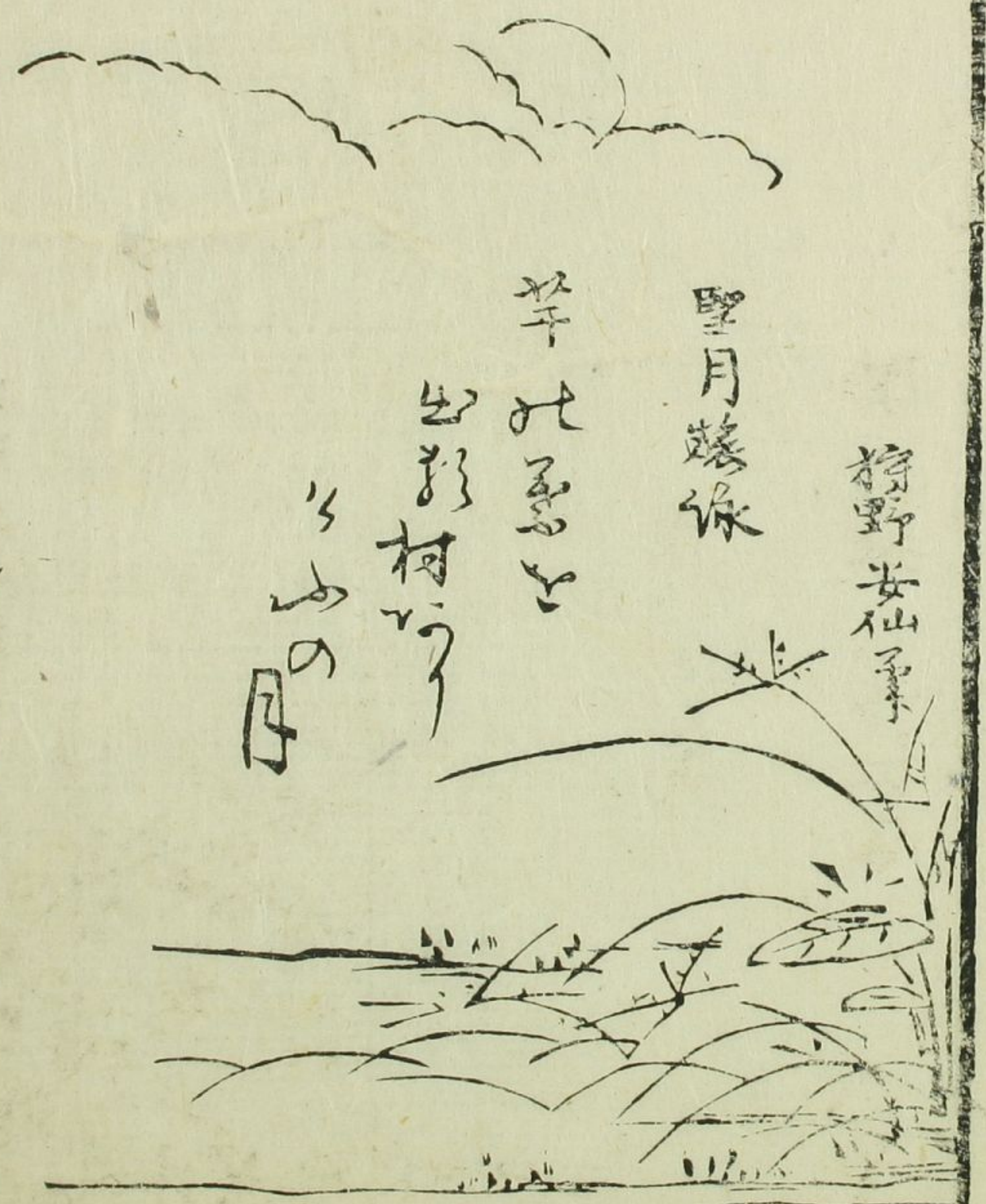
聖月露依

翠れふと

出羽村

夕の月

武藏菴臥措子



栲野阿仙百

題駒迎

都めくけ山里也

駒むくひ

落梅舎去留子



其引

屋月れ駒や哉つの里志る屋

屋月やさしと雲井小進む駒

己々春れ月小駒や牧乃駒

駒進塚の阿るしや三日れ月

高兒谷れ具屋月れ雲の丘

引浜よて駒や也く幾月の是

屋を海と臨切る大よやふれ月

京都

里仲

若水

會津若松

兩鶴

青牛

嵐夕

田丁

龜息

牧乃駒いあきくやうふれ月
 宰はく馬や蹴揚れ土けり
 棧や駒も揚りむくきあう
 駒の眼小照やふみの月れ出若
 友哉呼駒れ嘶や秀娘かみ
 若よめく月毛の駒哉素哉哉
 素駒やい塚れ若のみとほくし
 大おとまりや言て駿とんじまひ

風后
 遊回
 津昔
 貞松
 三夕
 洗馬
 開翠
 東都
 涼袋

才何おて鼻ま〜んや駒近
 大波公きや牛と追ぬく朝のじ
 星月の牛も素あうと死野の若
 今て〜人素ふる言む月の駒
 と川志ろ小月やち病く駒近
 春州小馬といあけ發白塚
 弱さくを人もうりあう素あ途

百丈
 榎雪
 東起
 素風
 紫藤女
 雄人
 鶴子
 武江
 水戸

ぬるれ人く集を〜して
 いう〜えと志たかおらう

駒家や深田 氣きふはてあし
 公くや駒も其名もは月額
 駒公もやい福るくろ毛よ高はを
 月雪れよ種撰るや駒むい
 有明の月気や眼たつあは遠
 音取のもきくく月気れ駒途
 案せたり案ても又よりあは遠
 六ふえる名坂東夢や駒むい

秩父 為谷
 讚列歌 百霊
 榎陽伊丹 蜂房
 甲斐 張雅
 韭崎 杜洲
 上毛 舟山
 前橋 黄牛
 古海 芭叩

八風り岡木よひたり萩れ著
 大森氏のやふふやこりて
 屋月や駒を譯強れ鈴ふき々
 狩生く月も平北や牧々原
 ありくや谷も屋月れ駒途
 あり駒も虫とて月小いあき熱
 えみ飽て駒も勇むや月の照
 屋月や嵐ふきさむ牧れ駒

羽鱗
 雄史
 神都 五松
 信陽飯場 菊雅
 反故
 甲乙菴
 租亮

駒をよや厚く一月も肥てゆく

上毛新町

高貞

大まをよや此ちのうもかつ煉れ風

松井田

山松

駒追ふ地ふけても耳小加せ

武列本庄

泥亀

いつれ以り死なぬの涙涙交堪野乃
萩とて筆後と一各小形小其地此
産とて風流好る此人小齋く其事也
や婦りふたり追き以信陽屋月の里
大森氏の家小萩の笠を以巧うた小
箸と創長と本列此雄交坊を地乃脚の
便に付けて予小婦れ重めつゝ愛も小

これいづと軽くかふるはーやまうまー小
凍せされとも清くーそ熱深きそれより用て
常ふ形も敬もまともや筆後ハ又房此
具小ーそ是故形も小まもこーも或やれ
志とふる人志の波のうもる浦小をささる
浪士の子れ熱ひまもさくれまーして
も涯と終も多ー著てふりのハも後小
りれまもふ六中本がうり小不取て一日も欠る遊
人と書ふ地ありまー一雄交坊地なみ破地不
杖曳り地固て祈るをきて其名作を謝中

萩の若さう新書妻と花を

尾列隠士七十九翁

也右

春一夏二冬二

天告音唱や毛いろも星此駒

飯田

素人

牧出家駒や多田井浪るり

花子

園あけぬ津あふりや月此駒

知足軒

張家駒も牧小吟く此駒六月

三眺舎

此一終家語迷ふ此駒此駒

似登亭

駒素や虫と大いひと終書

梵桐

星月井谷や道坂小駒むい

鳳来舎

赤来途去し十種此むい哉

棠左

身や石小てる星月の駒途

里三

星月の大書や積も去るみい

廬作

嘶此月小ふえりり星此駒

月君菴

星月や駒も死野の去る榮

宗耳

駒途うつふ小駒も積素哉

已友

星月も去る小みちてや駒途

伊水

星月の駒や尾花小ふ隠も

此々菴

阿加きるをゆるるも折るは

羊宗

去よいふむうふ聖母此駒

信春日

交風

駒之き此旗もほれを母の歌

さうくと風も喜ぶたり去あ途

牛勝

駒まや雲ふ囀くを帯り死

高楚可

如林

月あかりや、侍えたり去あ途

薰風

駒あてはあうう月あ途

雨柳

自徳なく駒此途や月あ途

始有

結あうもしてまゝ駒の柄う南

小諸

桂芝

駒まや旗をそのまゝ自徳

夏筵

駒をきれ及く月の娘より哉

菊喫

駒此出る瓢箪いまも蔓てなり

委伸

去あをきれほくや花野を端ちじ

貫歌

聖母の名ふお小駒を月毛哉

桃雨

去の面ふてるや月毛此去あ途

秦漢

種ふ出ても新く為や駒むふ

河上
心志

星月の駒や名小松白月毛
 星月此大あや囀く里もつも
 月々ける鄙ふも清く駒
 駒ふまこれむう〜城月ふえり
 大あまも都の月城は清
 歳牧ふりふたつてかや
 駒案や月もふとよ
 星月の牧やてるてふ駒むうい

御所平 里優
 矢野 梅雅
 白田 好山
 余地金山 雨笠
 相木 和聲
 小海 調雨
 小諸 里遊

駒案や伝法言禁此
 関此戸城なくや柳牧の月此駒
 積も〜也や柳牧の駒此
 案や烈率月りり〜も小牧の駒
 なく駒ふなくれて月や雲此と
 星月此駒や本善法城肥て
 駒案う新見送らんふの月
 水牧野此竹お控ん大あ

雲高
 柳意
 都風
 櫻井 和栞
 丸子 機笛
 如風
 赤洲
 風光

白丁小牝の白や大坂迄

整沢

流鱒

駒公まうや野系成鞍て月の系

叙

得月

何もまうや事蹟も一牧の女馬

今岡

故園

途まで雲井不登る月色哉

池田

津水

駒系此嘉成以ひたる若若哉

前山

家副

大東望此此族あう此月夜哉

上田

鳥舟

駒系此う古も森あうん大日月

飯宮

文下

大坂望此此有明くして月色哉

阿老

所牧野や己々影追ふ月の駒

下和田

寛之

振るる勢の駒治此此駒追

佐久

玉芝

長月や女馬鳴く牧の月

牧社

傍れりや所牧乃大東迄

燕石

大坂望此此や駒小をわして雲の上

遊鶯

大坂望此此月もアうる勢哉

登谷田

素泉

一輪く月の森若治や駒追

柯則

大東望此此於小月を肥てかく

文濤

鈴むし此さゆる駈洛や駒定

監名田 李東

駒さきや三日日やとハ都人

文耕

小まをきや道京喰下たぐ其似

栂山

駒さや礼脊小月をのせて仍

思一

小まをきや及く桶茶高きり

花明

屋月れ谷うや月と丸う肥

崎給

駒さのりりや意兒育の園

招舟

小まをきや本陰と題くは月額

仙丈

むしも駒此尾小取てかうまりり

昇沢 雨江

月のり小雲井小壻小牧此駒

春日 竹南

駒さや月りらとも小籠のり

花斗

駒とあ先て雲井のり地駒定

玉線

本のりり濃るや月毛此駒定

下城 栂雪

駒さ此雲井ろんとも駒さ

牧布施 鳥胤

小まをきや月も尾花も是を在

佳雄

雲井あてのりる月毛や駒定

芦田 語川

駒草や何くかか〜ん秋此隈

語曉

小ま塚此のたふ月のおまひ哉

風鳥

名〜おまひの月元此駒途

哥雪

日の曇も月ののかりやまの途

燕子

駒草や津田此長橋臨あじ

素明

駒草此躑ぶおまもその南

里株

月や照る程〜も満〜の駒

楚泉

駒草や尾苑さ〜れハ此てや〜

如英

八幡

出ま〜や月ひ〜も小日も満る

不一

駒草や言〜は月小〜れや〜

一正

雲此上照るや月元の星此駒

八重原
百二

冷む〜も〜名残ぬる由牧哉

南泉

阿〜駒や泣き〜糸萩い〜層

麻女

駒草や馬の叫〜く日も月と

望月馬塚連寺
仙風

駒草や木若此接ふ〜せよ

玉葉

星月や〜小房結も金取あ〜

醉仙

九重を於侍よひや屋れ駒
 養むしや晴てれし駒定
 駒定や殊不致珍も鈴鹿山
 大まふきれれ鞍の蔭縁や言縁
 又やたふし侍牧れ宛不月の駒
 駒定きや月りうとふふ山
 石山の月先早し大海むふ
 大まふきれれ縁由るや某是某妻

殿五月

松意 東水 秋里 梅香 遊霍 百樹 遊鳥 芥水

赫し駒もいとむや牧る月
 和舟小名の光る月毛や舟の駒
 月と共に舟縁由るふ無縁衣
 大まふきれれ屋や死野と改玉
 駒定や月色れもま城信濃より
 大まふきやや皆も負れし兼
 駒定きや柳の鞭も都りの

岩村田

假留 如雲 曾仙 朴之 筑友 冬水 穠花

駒之きや土土屋の瓢_ハ不_レ若_ク茶_ノ茶_ノ

東都

白醉

因_レ此_ノ小_ノ月_ノと_レい_テや_レ詠_むう_レ人

三杵

大_ノお_ノ公_ノき_ノや_レち_ノ川_ノと_レ言_テも_レあ_レ此_ノ川

古隆

駒_ノの_レゆ_レり_ノ月_ノも_レ公_ノき_ノ公_ノと_レ詠_野哉

冬餅

大_ノあ_ノ遠_ノ懐_ノ士_ノ此_ノ袂_ノ小_ノ月_ノ公_ノと_レ川

牡牛

そ_レ一_ノ五_ノ井_ノ小_ノ月_ノや_レら_レむ_レ人_ノ駒_ノ遠

狸丸

駒_ノ公_ノき_ノや_レ日_ノと_レ歌_ノ小_ノ結_ノて_レ十_ノ日_ノ月

大竈

大_ノあ_ノ公_ノき_ノや_レ松_ノ小_ノ笛_ノ一_ノ月_ノの_レ案

真澄

織婦人

松_ノ一_ノ續_ノり_ノの_レ杖_ノ載_レる_レき_ノ書_ノ日_ノ此_ノ即_ノ真

蕉_ノ翁_ノ此_ノ高_ノ吟_ノ小_ノ物_ノ尾_ノ杖_ノ結_レも_レ憚_レの_レ因

そ_レつ_レ一_ノの_レ表_ノち_ノう_レ塚_ノ造_レま_レ小_ノ一_ノ貫_ノ此

土_ノ杖_ノ運_レひ_レ一_ノ輩_ノ執_レ心_ノの_レあり_レ然_レこ_レハ

祖_ノ霊_ノと_レ磨_レん_ト此_ノ細_ノあ_レら_レる_レり_レり

駒_ノ案_ノ此_ノ木_ノ若_クや_レせ_レん_ト言_フ此_ノ月 芭蕉翁

仰_レ向_レ 言_フ一_ノ 因_レ此_ノ秋_ノ風

珪山

菊_ノ紅_ノ紫_ノ遊_レ魚_ノと_レの_レ香_ノ杖_ノ加_レり_レ其

素翁

頻_レ遊_レ乃_レ 仰_レ向_レは_レぬ_レく

柯則

すく降く譽れも雨の果一を此	燕子
此れ満干小急此阿く磯	里株
手相場を万俵焚燬まで	如英
身うけの嘘を男領城	一正
物う、此籍ふ能明の平とき次	楚泉
法守の湯之筆もさめく	素明
社祓此小紋も望い石たみ	不一
和哉るーと此あみ羊羹	南泉

月みの清庭くく采胡を母竹	文濤
虫圃くとの由駕志く	崎給
毒を捨ぬ麻のく小普門品	招舟
自由自在此市を六秋	仙丈
いもれりる花小田畑の焼り取	李東
喫も長閑る貴鏡老若	朴之

右 哥仙下略

駒素や花ち海里を若妻富
摩訶窟
珪山

駒素此むしや也しり此月
金山傳俳名
魯隱

幾秋秋雲井ふくやり此駒
廣除俳名
素筍

曇りあはれ馬代ふ敵毒然れ奉
廣除

名も明く若然る月の駒

跋

古記曰文武朝令諸國定牧地於

牛馬至_上于後世每歲仲秋有勅使

駒牽帝出御紫宸殿闡覽信州之

貢馬_ヲ堅月牧貢馬_亡匹也清和帝

貞觀七季冬制信濃國勅使牧野馬

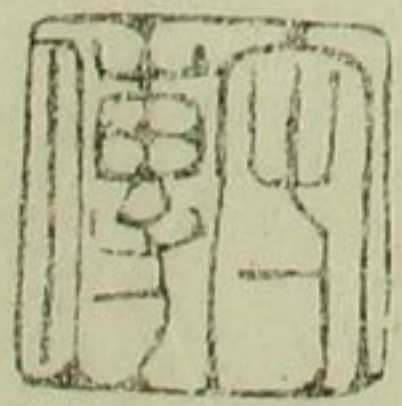
元八月廿九日貢之今定十五日云云

自是牧在，聖月之名，矢物換星移。
駿駑漸殄，冀北遂空。惟今只在，
御馬城之地也。而聖月，駑今古稱之。
會右翁駑牽之吟銘之，於一片石萬古
留此山藏冢以伊勢，神官慶德河列
家慶之筆，銘碑以園持進前亞相
基衡鄉之染翰，因茲素笏風士

冀都鄙風雅諸君子集駑牽之
章句，錄諸梓為駑牽之集，遍
欲充尚流諸士之美觀耳。

信陽聖月

寬政壬子之歲 金山釋燈印傳誌



纂集

望月

嘯月臺素笥

斤倉

帶雨篁仙風

鹽名田

時々菴柯則

行年七十三

行年七十四

行年七十五

行年七十六

行年六十六

行年六十七

行年六十八

行年六十九

行年七十

行年七十一

行年七十二

行年七十三

行年七十四

行年七十五

行年七十六

行年七十七

袖助 摩訶憲珪山

寬政五癸丑春

寸主

鈴本氏

